

## 新型コロナウイルスの影響で頭脳が働かない 考え続けたい男女格差と会派の問題

感染症の蔓延で、二月以降は家に閉じこもり、三密と思しきところには足を踏み入れなかった。月一度の理髪も我慢。だが、八〇〇年前、かの鴨長明さんでさえ京の山中の庵に籠っているときはボロをまとつても気にならないが、街に出るときはさすがに恥ずかしいといっていたことを思い出した(方丈記)。そこで、いっぺん三密回避とはいっても、近所や家族への多少の配慮は必要と思ひ直し、四月ぶりに理髪店へ。

政府は緊急事態宣言を解除したが、有効な政策があつて沈静化したわけではなく、疫学的な観点からいって人々の三密回避努力が功を奏したということだろう。けれども、ワクチンや治療薬はない。かつ陽性が未確認の無症状感染者による感染拡大の危機は依然続いているわけだから、三密回避の努力がゆるめば再び感染は拡大する。その意味で基本的な問題はまだまだにも解決していない。

私の生活には大きな変化はないが、外出しないから時間はたっぷりある。だが、日常の思考回路はどこかで切断され、自分の分野でこれまで取り組み、これからも続けようと思つている問題でさえ頭が働かない。なぜなのか。新型コロナウイルス感染症は、この四月月間で世界では四十万人以上の死者を出す、まさにパンデミック状態。この世界規模の死に至る恐怖はだれもが免れない。

だが、それだけではないだろう。パオロ・ジョルダーノは近著『コロナ時代の僕ら』で次のように述べている。「流行がもたらしうる変化のすべてが怖い。見慣れたこの社会を支える骨組みが実は、吹けば飛んでしまいそうに頼りない、トランプでできた城にすぎなかつたと気づかされるのが怖い。そんな風に全部リセットされるのも怖い、その逆も怖い。恐怖がただ過ぎ去り、なんの変化もあとに残さないのも、怖い。」

この指摘を私流に理解すれば次のようである。まだはつきり見えないが、コロナ後の世界は、従来の慣習・制度・伝統・思想が通用しなくなるほどの大きな変化を余儀なくされる。そのなかで私たちはコロナの前と後の思考の連続性の適・不適を問われることになるが、そのあたりのことが見通せないため、思考の足踏み状態を招いているのではないか。

このようなわけで、議会について二月までに考へて紹介できるような成果をあげることはできなかった。一つは昨年一二月に世界経済フォーラム(WEF)が発表した、各国の男女格差(ジェンダーギャップ)の報告書で、日本は一五三方国中一二一位で過去最低となり、男女格差が逆に開いていることがわかつて衝撃を受け、この問題を自分な

りにもう少し考えてみるつもりだった。

それは女性議員の増大による議会の再生という観点からの考察だったが、コロナ禍ですっかり思考停止し、結局はむかし読んだ古典を再読するだけにとどまった。ホメロスの『オデッセイア』、アリストパネスの『女の議会』と『女の平和』、モルガンの『古代社会』、エンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』、ミルの『女性の解放』、ペーベルの『婦人論』など。それに新刊のメアリー・ピアード『舌を抜かれる女たち』も。

もう一つは議会の会派の問題。昨年来、道新は長期間かつ大きなスペースで、道議会の会派室内における禁煙問題の成り行きを報道した。議員の圧倒的多数が禁煙賛成なのに、最大会派のごく一部の議員の抵抗があつて議会としての意思決定ができない。この問題を機に私はこれまで考えてきた会派の功罪をもう少し深掘りしてみようと、資料の閲覧やヒアリングを予定していたが、これもコロナ禍で断念せざるをえなかつた。

この二つの問題は、コロナ禍をふまえた議会のあり方として今後も考え続けていきたいと思つている。会派のしほりに安住する議員からなる硬直した議会ではなく、会派をこえて自由に発想する議員が創造的・横断的に集う議会への転換が求められる。硬い会派は男性中心議会の産物であることが多い。女性議員が増大すれば会派が変化し、そのことで議会の政策論議の回路が柔軟化・多様化すれば、議会の質は間違いなく向上する。

本稿は自治日報(六月二六日号)の原稿を手直しして再掲した。読者の海容を請う。

へかんばら まさる・議会技術研究会顧問